JAPAN HERITAGE
日本遺産

「鮭の聖地」の物語

根室海峡 一万年の道程

鮭の聖地パンフレット（日本遺産）.indd 1 2021/07/30 10:19:44

— 目 次 —

● 世界に開かれた野付半島と人々を魅了し続けた鮭——2
● 鮭に支えられ一万年——4
● 幕末、会津藩士が育てた産業の灯火——6
● 鮭の物語は大地へと続く——8
● いまも鮭は暮らしとともに——10

世界に開かれた野付半島と人々を魅了し続けた鮭

北海道最東端、眼前に国後島を望む根室海峡。その沿岸中央部に特異な形の半島が突き出ています。強い沿岸流が運ぶ砂礫の堆積が生み出した、全長28㎞に及ぶ日本最大の砂嘴（さし）《野付半島（のつけ）》です。左右に海が迫る野付の一本道を行くと、ナラワラ、トドワラという立ち枯れた樹林が広がります。その荒涼とした光景はまさに〝最果ての地〟。しかし縄文時代から江戸時代に至るまで、野付は国後島への渡海拠点となり、時にはその先の千島列島を通じ、世界とつながっていました。日本列島の東門として、絶えず人々が往来する「道」の役割を担ってきたのです。その最盛期の賑わいは、かつて先端に歓楽の場があったという『幻のまちキラク伝説』として語り継がれています。

時代を越え人々の往来を誘ったのは、根室海峡沿岸の山海川の恵みであり、その最大の産物は、大地と海とをつなぎ、当地のあらゆる生命（いのち）の支えとなった鮭でした。毎年秋、根室海峡に注ぐ河川に遡上を繰り返す鮭は、アイヌの伝承で「知床の沖にいるカムイ（神）からの贈り物」とされています。この遥か昔から続く自然の摂理の下、当地では鮭を巡って人と自然、文化と文化の衝突と交流が起こり、数々の物語と共に、根室海峡に続く幾筋もの「道」が誕生するのです。

北海道最東の海、根室海峡。
この地では遥か一万年の昔から、絶えず人々の暮らしが続いてきました。
その支えとなったのは、大地と海とを往来し、あらゆる生命の糧となった鮭です。
毎年秋に繰り返される鮭の遡上という自然の摂理の下、
当地では人と自然、文化と文化の共生と衝突が起こり、数々の物語と共に、海路、陸路、鉄路、道路という、根室海峡に続く「道」が生まれます。
一万年に及ぶ時の流れの中で、鮭に笑い、鮭に泣いた根室海峡沿岸。
ここはいまも、人と自然、あらゆるものが鮭とつながる「鮭の聖地」です。

（上）野付半島の中ほどに広がる「ナラワラ」。ミズナラなどの樹木が海水に浸食され、立ち枯れたまま林を形成している。
（右）かつて冬の野付半島に観光客の姿は少なかったが、近年はインスタ映えする「氷平線」の景観や、冬季に飛来するオオワシやコミミズクを求めるバードウォッチャーでにぎわっている。

（右）根室海峡沿岸の遺跡からは古代北方文化にまつわる多くの出土品が発掘されている。上は根室市弁天島遺跡、下は羅臼町松法川北岸遺跡の出土品。いずれも海洋狩猟民として根室海峡を往来したオホーツク文化の暮らしを伝えている。
（左）野付半島先端付近にある墓。「幻のまちキラク伝説」のモデルとなった野付通行屋があった当時のもの。

鮭の聖地パンフレット（日本遺産）.indd 2-3 2021/07/30 10:19:56

日本最大の規模を誇る竪穴住居跡群「標津遺跡群」。地面にはっきりと残る無数の穴は、一万年に及び人の暮らしが続いてきた証である。今もアイヌの大切な場所として先祖供養の儀式が行われている。ポー川流域に広がる遺跡は、洪水対策から多くが川面から15メートルほどの高台に広がっている。遺跡周辺ではきれいな伏流水が湧き出る場所が80ヵ所以上あり、飲料水の確保とともに、ここに遡上する鮭も人々の暮らしを支える貴重な資源であった。

鮭に支えられ一万年

野付から北へ約10㎞の場所に、激しく蛇行を繰り返すポー川が流れています。その流域には、無数のクレーターのようなくぼみが延々と連なる独特の景観が広がっています。このくぼみは古代の竪穴住居跡（たてあなじゅうきょあと）です。くぼみの数は4400を超え、日本最大の竪穴群《標津遺跡群（しべついせきぐん）》を形成しています。この遺跡は、一万年前から17世紀に至るまで途切れることなく人が暮らし続けた結果、いまに残されました。遺跡を発掘すると、あらゆる時代の竪穴から多量の鮭の骨が見つかります。標津の大規模竪穴群は、毎年秋、鮭を求め各地から集まる人々の「道」の集積地であり、自然との長い共生の歴史をいまに伝えています。

標津遺跡群に集まった人々の道程は、根室海峡沿岸に残るチャシ跡の存在から推測できます。チャシ跡とは崖際などを溝で区画した、13～18世紀にかけて利用されたアイヌの遺跡です。時代と共に様々な役目を担いましたが、その本質は、コタン（村）共有の神聖な場所としての役割にありました。チャシ跡周辺には同時代のコタンが必ず存在するだけでなく、古代の竪穴住居跡も確認できます。そこが暮らしの拠点として、長きにわたり利用され続けたことがわかるのです。北海道各地に残るチャシ跡の多くは、内陸部の河川合流点付近にあり、当時川筋を「道」とする交通網が発達したことが読み取れます。

しかし根室海峡沿岸では、野付や沿岸一帯の河川河口付近において、海に面してチャシ跡が築かれています。この地域では河口を湊とし、古くから海を「道」とする交通網を発達させてきたのです。

海を臨む根室海峡チャシ跡群が伝えているのは、鮭を求め標津遺跡群へと往来した人々の道程であり、チャシ跡から見渡せる景観は、当地で繰り広げられた一万年の物語の舞台なのです。

根室海峡に流れ込む川の河口付近にはチャシ跡が多く残されている。上は「タブ山チャシ跡」（標津町）、下は「ヲンネモトチャシ跡」（根室市）。チャシはアイヌコタンの神聖な場所としてつくられたのが始まりとされ、時代とともに談判の場や鮭の資源監視場、そして戦いの砦として、役割を変化させてきた。

鮭の聖地パンフレット（日本遺産）.indd 4-5 2021/07/30 10:20:04

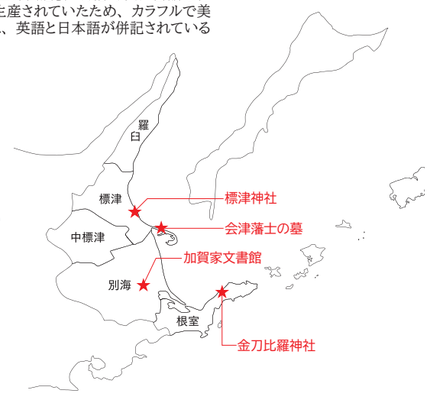
幕末、会津藩士が育てた産業の灯火

江戸時代、根室海峡沿岸に進出した和人は、当地の鮭の質・量の豊かさに驚き、ここに鮭漁の漁場を拓きます。しかしその搾取的経営は、労働力となったアイヌの反感を買い、幕府をも巻き込む騒動にまで発展したこともありました。根室の《金刀比羅神社》、標津の《標津神社》は、いずれも海峡沿岸一帯の鮭漁を管理した「根室工会所」、「根室下会所」の社を前身とし、北海道最東の海を全国へとつないだ船の「道」の歴史をいまに伝えています。

18世紀以降千島列島周辺では、鮭を求め北上する和人と、ラッコの毛皮を求め南下するロシア人の衝突が繰り返されます。幕末には択捉島とその先のウルップ島の間で最初の日ロ国境が定められました。野付にある「會」旗を掲げた墓石は、日本東門の国境警備と開拓を担った《会津藩士の墓》です。当時標津代官を務めた南摩綱紀は、文化の異なるアイヌと和人が共に開拓に臨む水産業のまちづくりを構想し、その思いを「標津番屋屏風」に込めます。当時鮭は高級魚で、中でも当地の鮭はその品質の良さから、他地域とは比べものにならないほどの価値があり、江戸時代のブランドの一つとなっていました。《加賀家文書》には徳川将軍家にも献上されたことが記されています。南摩はこの高品質の鮭を基盤に、当地にまちの礎を築きました。

明治11年、北海道開拓使が西別川河口に《別海缶詰所》を開設します。工場はやがて民営化し、国後島を含む海峡沿岸に続々と増設され、鮭缶詰はヨーロッパやオーストラリアなど、世界市場に輸出されます。北海道最東の海から続く船の「道」は世界に延び、根室海峡沿岸一帯のまちは大きく隆盛したのです。

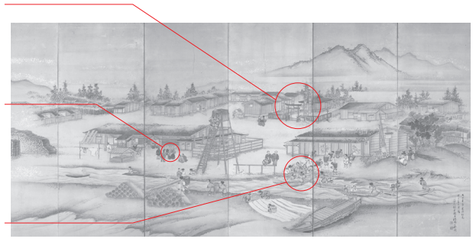
明治になって根室海峡沿岸には多くの缶詰工場が設けられた。当時の缶詰会社の一つが、現在の根室の酒蔵「碓氷勝三郎商店」。明治時代、缶詰は世界市場を視野に生産されていたため、カラフルで美しい缶詰ラベルは、英語と日本語が併記されているのが特徴。



[標津番屋屏風]

南摩が蝦夷地代官となった文久2（1862）年は、藩主松平容保公が京都守護職に任ぜられ、藩兵千人を引き連れて京都入りした年でもあった。藩の一大事に遠く離れた北の地に赴かなければならないことは、南摩に深い失意をもたらした。しかし標津で、鮭の群れと造船にも適したミズナラなど良質な資源を目にした南摩は、欧米列強の脅威に対抗していく構想を描き始める。その構想を絵に表し、当時京都にあった藩主容保公に伝えるために誕生したのが標津番屋屏風。

（上）「金刀比羅神社」（根室市）と（下）「標津神社」（標津町）。標津神社は今も屏風と同じ場所にあるため、神社を起点に標津を歩けば当時のまちを思い描くことができる。



屏風中央に描かれた社は、現在の標津神社の前身。社の位置は当時も今もほとんど変わりないため、この屏風絵は現在の標津神社周辺を描いたものであることがわかる。

文久2年から標津代官を務めた南摩綱紀は、アイヌと和人が共に開拓に臨むため、互いの文化の違いを理解し合う教育活動に力を入れた。

標津川に遡上した鮭を水揚げし、山漬けに加工しているのはアイヌたち。標津のアイヌは、南摩が記した『視民如傷（「傷ついた人々をいたわるように民をみる」の意）』の書を額に入れ、標津会所の壁面に掲げ、明治時代以降も心の拠り所としていた。

「俄羅斯舩之圖」。ラッコの毛皮を求めて南下するロシアの脅威によって、安政6（1859）年、蝦夷地を分割し、仙台藩、秋田藩、津軽藩、南部藩、庄内藩、会津藩に領地として分け与え、各藩分割統治による開拓と警備が始まった。

野付半島にある「会津藩士の墓」。慶応4（1868）年、戊辰戦争が始まり、標津の会津藩士達の多くは郷里へと戻り、会津戦争に臨んだ。

幕末にアイヌ語通訳として活動し、後に標津場所支配人となった加賀屋伝蔵は、当時の根室海峡沿岸を知る貴重な資料「加賀家文書」を後世に残した。別海町郷土資料館の付属施設「加賀家文書館」には北海道の名付け親・松浦武四郎が当地の筋子を所望した手紙や、江戸時代のブランド鮭を紹介した絵図を見ることができる。

鮭の聖地パンフレット（日本遺産）.indd　6-7
2021/07/30　10:20:14

鮭の物語は大地へと続く

根釧台地を空から見ると、大地に幅180メートルある林帯によって構成された巨大な緑のグリッドが広がっている。これは「格子状防風林」と呼ばれ、明治時代に計画された殖民区画の名残として、開拓の進展によって地上に姿を現わした。

明治時代半ば以降、天然魚に頼った鮭漁は、次第に資源が枯渇します。明治24年には人工ふ化事業に着手しますが、その成果を得るのはまだ先のことでした。西欧諸国と肩を並べようと国を挙げて邁進した明治時代、日本東門の安定と発展は不可欠であり、鮭漁を補う新たな産業の確立が求められました。現在、根室海峡では、根室の昆布や野付湾のホッカイシマエビなど、多彩な水産品が水揚げされています。これらは鮭資源の減少に直面した漁業者が、ここで生きるために選んだ漁の姿です。また野付で目にする《海辺の牛舎跡》は、漁業者が漁の傍ら、副業として畜産農業を行った、かつての半農半漁の暮らしの名残です。

この畜産農業の一つ酪農が、大正末期以降、冷涼で安定した農業を阻み続けた根釧（こんせん）台地内陸部に拡がり、全国から集まった開拓者の手で、一大産業へと成長しました。《根釧台地の酪農景観》には、北海道や国の農業施策はもとより、不屈の精神で厳しい自然と向き合い、広大な原野を切り拓いた開拓者の思いと歴史が込められています。別海の《旧奥行臼駅逓所》や標津の《旧

【鮭漁から広がった根室海峡の半農半漁と多彩な漁業】

野付半島に残る海辺の牛舎跡

野付湾の打瀬網による
ホッカイシマエビ漁

根室の昆布漁

【内陸部の産業振興に関わった農業と内陸交通の遺産群】

内陸交通遺産

初期内陸交通網駅逓制にまつわる
旧奥行臼駅逓所（別海町）

根釧台地の殖民軌道関連資産・旧別海
村営軌道ディーゼル機関車（別海町）

根釧台地の殖民軌道関連資産・
殖民軌道の転車台（中標津町）※

標津線関連資産・旧根室標津駅転車台
とC11形蒸気機関車（標津町）

標津線関連資産・旧奥行臼駅（別海町）

農業遺産

旧北海道農事試験場根室支場
（中標津町）※

根釧パイロットファーム関連文化財群
（別海町）

根釧台地の酪農建造物群
（別海町・中標津町・標津町）

製酪会社の集乳所跡（中標津町）※

※印は令和２年度日本遺産申請時構成文化財には含まれていない関連資産

根室標津駅転車台》など、根釧台地の内陸交通遺産は、《酪農建造物群》など農業遺産と共に、持続可能な産業の確立を目指し、海から大地へと展開した先人たちの、内陸の「道」の歴史をいまに伝えています。

いま根室海峡沿岸で目にする数々の一次産業は、半世紀に及ぶ鮭資源減少時代に、人々が日々の暮らしをつなぎ、当地の発展を夢みて臨んだ、新たな挑戦の結晶なのです。

鮭の聖地パンフレット(日本遺産).indd 8-9 2021/07/30 10:20:23

いまも鮭は暮らしとともに

昭和40年代、人工ふ化事業がついに結実し、長く不漁が続いた鮭漁は、前年比2倍もの驚異的漁獲量更新を繰り返します。かつての高級魚は、日本の食卓を彩る最もポピュラーな食材の一つとなり、全国の店頭には日々塩鮭が並んでいます。鮭を巡る状況が大きく変わる中、かつて内陸開拓を牽引した標津線は、東北地方からの季節労働者「青森衆」を招く「道」となり、不足する鮭漁期の労働力補強に貢献しました。鉄道が廃線となったいまは、アスファルトの「道」を通り、全国そして世界から、鮭加工に従事するため集まる「シャケバイ」と呼ばれる若者達の姿が、毎年秋の風物詩となっています。そして毎年12月になれば民家の軒先に干される《鮭とば》や、江戸時代から伝わる塩蔵法《山漬け》など、熟成させ旨味を増す鮭の保存法、さらに家ごとに受け継がれた味を持つ《鮭飯寿司》など、一尾を余すところなく使い切る豊かな鮭の食文化が、いまも当地に伝えられています。

一万年にわたり、当地で織りなされた数々の物語。そこには常に鮭との関りがありました。鮭に笑い、鮭に泣いた根室海峡沿岸は、人も自然も、あらゆるものが鮭とつながる「鮭の聖地」であり、いまもその恵みへと通じる「道」に、人々の往来が続いています。

根室海峡沿岸に根付く鮭の食文化

別海町を流れる西別川の鮭は、徳川将軍家へも献上された。
別海漁協では、江戸時代から続く製法を継承した「山漬け」が生産されている。

民家の軒先で自家製の鮭とばを干す風景は、根室海峡沿岸の冬の風物詩（標津町）。

サーモンフィッシングなど鮭は地域のファンを得る素材としても期待。

長い年月をかけ、一尾を使い切る食文化が根付いた。
近年は鮭節など新たな加工品も人気を博している。

祭りやイベントなど、鮭は暮らしとともにある。

鮭の聖地パンフレット（日本遺産）.indd 10-11 2021/07/30 10:20:31

「鮭の聖地」の物語を学べる根室管内の施設

根室市歴史と自然の資料館
住所：根室市花咲港209
電話：0153-25-3661

別海町加賀家文書館
住所：別海町別海宮舞町29
電話：0153-75-0802

野付半島ネイチャーセンター
住所：別海町野付63番地
電話：0153-82-1270

中標津町郷土館
住所：中標津町丸山2丁目15番地
電話：0153-72-2190

標津町ポー川史跡自然公園
住所：標津町伊茶仁2784
電話：0153-82-3674

標津サーモン科学館
住所：標津町北1条西6丁目1-1-1
電話：0153-82-1141

羅臼町郷土資料館
住所：羅臼町峯浜町307-1
電話：0153-88-3850

発行：標津町教育委員会
お問合せ先：標津町ポー川史跡自然公園
電話：0153-82-3674

鮭の聖地パンフレット（日本遺産）.indd　12　　2021/07/30　10:20:35